

RCC研究プロジェクト
「自然の問題と聖典」

- 樋口 進（キリスト教と文化研究センター教授）
嶺重 淑（人間福祉学部准教授）
土井 健司（神学部教授）
平林 孝裕（国際学部教授）
水野 隆一（神学部教授）
奥野 卓司（社会学部教授）
近藤 剛（学外・神戸国際大学准教授）
大宮 有博（学外研究協力者・名古屋学院大学准教授）

この研究プロジェクトは、2011年度より始められた。以下に、今年度行われた研究会の簡単な報告をする。

第1回研究会:2011年5月31日「旧約聖書における自然災害」樋口進RCC教授。ここでは、まず20世紀以降に世界に起こった主な自然災害の状況が語られたのち、旧約聖書においてどのような自然災害が記されているかの概観がなされた。すなわち、地震、洪水、干ばつ、イナゴ、疫病、嵐、雷、雹、硫黄、野獣などである。次に、自然災害に遭った時の人々の反応について述べられた。さらに、預言者の「威嚇の言葉」における自然災害、終末論における自然災害、神の自然支配への信仰、について述べられた。

第2回研究会（ミニフォーラム）:2011年6月30日「わたしたちのいのちの源に目をむける——名古屋学院大学での実験動物感謝記念礼拝の取り組み」大宮有博名古屋学院大学准教授。ここでは、発表者の勤務する名古屋学院大学で行われている「実験動物感謝記念礼拝」についてその取り組みの経過と姿勢について述べられた。まず、実験動物感謝記念礼拝の背景が述べられた後、実施された実際の礼拝についての紹介がなされた。そこでは、読まれている聖書箇所、祈りの言葉、歌われている讃美歌も紹介され、またそこで参加者間の対話もなされていることが述べられた。

第3回研究会:2011年10月17日「神学の緑化——パウル・ティリッヒを手がかりに」近藤剛神戸国際大学准教授。ここではまず、発表者が「エコ神学」を構想していることが述べられた後、「神学の緑化」の状況を、ウォルター・ラウダーミルク、ジョセフ・シットラー、リチャード・ベアー・ジュニアなどの所論を紹介しつつ説明された。次に、パウル・ティリッヒの「エコ神学」について、自然の栄光・悲劇・救済という観点と、技術と経済に対する神学的検討という観点から論じられた。

第4回研究会:2011年11月17日「動物愛護観のダブルバインド——震災・事故における動物救援活動を例に」奥野卓司社会学部教授。ここではまず、人間と動物の関係の歴史と現状が述べられ、次に大震災・原発事故での動物救援活動の報告がなされた。そこでは、現地救援活動での混乱・対立の「動物愛護観」の違

いによる背景が述べられた。そして、これらを踏まえて、未来に向けての、人間と動物の共有の可能性と課題が語られた。そして、そこに向かってのキリスト教の意義と役割についても触れられた。

以上のように、今年度4回の研究会が行われた（ミニフォーラムを含んで）。参加者は数名から10数名であったが、発表のあとはいずれも活発な質疑応答、討議がなされ、非常に実りある会であった。

なお、2010年度まで行われた「聖典と今日の課題」プロジェクトの成果は、2011年9月に『聖典と現代社会の諸問題』として、キリスト新聞社から出版された。

（樋口 進）